

北地域後援会是我孫子1～4・久寺家・台田・つくし野・並木・根戸・布施のエリア

キンラン
(絶滅危惧種)

しらかば北

発行責任者
井上文夫

市政報告会と後援会総会 多くの参加で盛大に開かれる

4月20日、北近隣センター・つくし野館で、船橋まきさんの市政報告会と我孫子北地域後援会の総会が開かれました。参加者は22人で、熱のこもった意見交換の場となりました。

【市政報告】

まず船橋市議から「皆さんの熱心な応援で当選することができ、無事に野村貞夫さんの後を継ぐことができました。有り難うございました。」

自宅前の踏切見守りは毎朝続けていますが、新1年生も踏切を通るように、私も新1年生から元気をもらっています」とお礼の挨拶がありました。

その後、初登壇した12月議会と3月議会の市政報告がありました。船橋市議は12月議会では3点にわたる



質問①
自宅近くの危険な通学路に安全ポールの設置

を②原爆投下時間に合わせて我孫子市でも黙とうを③選挙は最寄りの投票所でも出来るように）をしました。

また、3月議会では「アスベスト問題」に絞って質問しました。

(これらの質問の詳しい内容は「しらかば北」2月号と4月号に掲載しておりますので省略します)

この4つの質問のうち、「自宅近くの危険な通学路に安全ポールの設置を」については2月末に市が設置してくれました。早速成果がありました。



残りの質問(3項目)についても粘り強く追及していきますと、船橋市議は力強く表明しました。

【総会】

その後休憩をはさんで総会を開きました。

総会では、市政の全般にわたる数々の問題について活発な発言がありました。

①市内の小中学校統廃合、②教師不足や子ども不登校、③補聴器購入の場合の市の補助を、④台田の信号機設置を、⑤車椅子がマン



があることが分かったという切実な発言が心に残りました。

また、学校統廃合ではなく小規模校を守り充実させる運動や、給食の自校調理方式を守る運動、補聴器の補助を求める運動、台田の信号機を実現させる運動など、広く市民の方々と力を合わせて取り組んでいる実態も出されました。

我孫子北地域後援会は、住民の皆さんの様々な要求をお聞きして、住みやすい我孫子北地域にするために皆さんと共に頑張りたいと、決意を新たにしました。

ホールにひっかかり転倒した、⑥歩道がなかったり狭かったりで自転車の運転が危険、⑦地下通路に水が溜まり水はけが悪いなど、数々の問題が出されました。

(注) 総会に参加の皆さまから、「しらかば北」発行の手助けにと、多くのカンパをいただきました。厚く御礼申し上げます。誠に有り難うございました。(井)

信号機をつけて！

アッ危ない！

元しいな酒店前



←我孫子駅方面

→6号方面

この交差点(台田2・3丁目)は、国道6号方面から我孫子駅方面からの車が多いうえ、通勤者・小中学校の子ども・保育園への親子や自転車などで大変な混雑ぶりです。

信号機の設置は、地域の皆さんの願いです。事故が起きてからでは遅いのです。信号機実現のため町会・自治会など地元の声の届ける必要があります。

この後援会ニュースのカラー印刷を継続するために読者の皆さまのご支援をお願い申し上げます。

連絡先

井上

花火

教員不足が止まらない。「#教員不足をなくそう!緊急アクション」が2023年度に

教職員に行ったアンケート結果を公表した。それによると、公立小学校教員の37%が4月の年度当初から不足していたと回答した。12月には64%が勤務校で教員不足が起きていると答えた。中高も同様の結果。特別支援学校では4月に欠員があったと答えた教員は63%もいた▼5月11日開催の「ふれあい懇談会」で市長は、我孫子市では4月当初は不足する場面も起こりうる」と述べた。全国の学校がいつ、教員不足になってもおかしくない状況なのかもしれない▼「産休・育休の代わりが見つからない」「自習が増えた」「療休者の代わりが見つからず、その授業ができなかった」「年度途中で担任不在となった学級が荒れた」など、子どもたちの学びと成長に悪影響を及ぼしている▼教員の定数を増やし、長時間労働に歯止めをかけなければ教員志願者は増えない。どんなに教育のIT化が進んでも、コンピューターに人間を育てることはできない。大切なのはFace to Faceの教育である。(新)

続・日経新聞を読む

香月義彰

今回は、4月1日の日本経済新聞「経済教室」の記事です。『好調・日本企業、今後の戦略』をテーマとして経済学各分野の研究者が日替わりで1ページを使って論じます。

この日は企業統治論の名誉教授が『人件費と設備投資増やす時』のタイトルで述べています。ポイントは三つ

①大企業は配当だけ増やし投資をおろそかにした。日本の大企業は一見「好業績」だが、まやかしかがある。成長投資を避け、配当だけを上げた。92年頃配当は設備投資の1割ほどであったが、21年には配当が設備投資を上回った。

②人件費も増やさずヒト中心の経営を放棄した。配当と人件費の関係も同様に急変した。01年の配当は人件費の6%であったが、22年には47%にもなっている。背景には大企業の経営原理が株式市場等からの圧力により米国型資本主義の流れへと変化したことがある。ヒト中心の経営姿勢を掲げて成長してきた大企業

業が株主還元だけに偏重する経営になった。

結果、大企業の労働分配率は9%減少し、株主分配率は11%増加した。

ここで筆者は「このようないくつ加価値の分配で、企業が長期的に成長できるだろうか」と問題点を示し、「③競争力の源泉は社員の知恵とエネルギー」である。株主偏重ではなく、従業員への分配をもっと重視すべきだ。

そのための資金余力は、配当抑制であれ、内部留保の活用であれ、多くの大企業は十分に持っている。配当金の過年度増加分の3分の1を設備投資と人件費に配分しても、過去十年間のどの年の配当分配率より高い。

日本には配慮・手間を惜しまない国民の質や高品質・低価格で提供できる企業能力等成長投資への基礎的可能性は大きなものがある。成長投資・

人材育成・人件費の増加にかじを切るべきだ。

以上のように現状を分析し、打開への根拠となる資金も明示している。根底に日本企業の未来に対する危機感がある。また、資本金十億円未満の中堅・中小企業をこの論議の中から除外しており具体化に説得力がある。

日本の大企業を継続的に成長させていくという視点で配当金額にまで踏み込んだの分配論は新鮮だ。こうした研究者達と交流できる可能性はあるだろう。

私の写真館



3月号に掲載の「枯れ木」が見事に花を咲かせました。樹齢40年を超えていると言われます。(江角)

(2024年4月2日)

この人に聞く 野村貞夫さん (1)



2期8年我孫子市議会議員として活躍した野村貞夫さんに聞きました。

昭和19(1944)年福井県の敦賀市に生まれた。父親はラジオ商だった。鯖江市の神明小学校へ入学し、「秀才3羽ガラス」と呼ばれた。友達と先生の家をよく訪ねたりしたこともあって先生にあこがれていた。

中学校2年生の時、家族で福井を出て、東京の荒川区で中学を卒業した。卒業して父親と一緒に水道の配管工事の仕事をした。

安定した仕事に就きたいと思い、1965(昭和40)年、新聞の求人広告で見つけた、日本出版販売会社に準社員として入社、練馬営業所で働き始めた。会社の労働組合は入社当時「御用組合」だったが、組合活動に参加して青年部をつくり役員になった。そのためお茶の水の本社に異動させられたが、本社に異動してから組合の執行委員を務めた。

組合の役員になった時期、日本出版販売労働組合は「御用組合」から闘う民主的な組合に変わっていった。労働条件での改善が進められて準社員は短期間に正社員となった。組合では組織部に属し、組織強化のため全国の支社オルグなどの活動をした。

そんな中で職場の同僚から「赤旗まつり」に誘われたりして、共産党の活動に共鳴して1968年日本共産党に入会した。

組合活動と同時に職場の地域でもある千代田地区での地域活動にも取り組んだ。そうして1971年、共産党千代田地区委員にも選ばれた。

地域での活動はいろんな人とのつながりがあった。楽しかった。選挙活動も楽しかった。そのため神田地域を地盤とするベテランの区議会議員の選挙対策委員長を3期連続で担当した。(つづく)